慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	唯物史観に於ける「生産方法」・「生産力」の問題
Sub Title	
Author	平井, 新
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1947
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.40, No.4 (1947. 4) ,p.199(27)- 226(54)
JaLC DOI	10.14991/001.19470400-0027
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19470400-0027

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

なければならぬ。而してそれが人の意思の內容をなし、行爲の指針となる。

併しながらかゝる理想としての調和が、實際に必ず實現されるとは限らない。不調和も亦實際に免かれ得ない。それは一時的なものでもなければ、又些細なものでもない。人の性質それ自體の中に在るものである。社會的環境の中にも存在する。たゞ不調和は人々の意思を導いてより調和のある世界へ赴かせる素材となる。かくして社會の進步は不斷の試行錯誤の系譜を展開する。我々が自己の意思的行爲をより自由にする途がその經驗の蓄積を通じて決められる。それは同時に我々の主觀的な價値判斷がより客觀的になりより合理的になるといふことに外ならない。

八、結び

最後に辿りついた一應の結論は、未だ最初に提出した疑問に答へるに十分なものとなつてゐない。私が論證しようとしたことは、いはゆる「空想的」といはゆる「科學的」との通俗的な區別が極めて表面的な理解に止まるのであること、論理が非合理的なものでなくして、合理的なものであること、而して進步の社會哲學の途を示すことにあつた。そのためには上に述べた道德的自由の問題をこえて、更に社會的自由、社會的倫理の客觀性と歷史的進步の意味をも更に論及しなくてはならぬ。この小論文では、僅かに問題の提出と、消極的な批判と最後に意思の自由に關する一應の結論を以て、問題の解答の一定の方向を暗示することで滿足しなくてはならぬ。

唯物史觀に於ける「生產方法」・「生產力」の問題

平井　新

（一）

唯物史觀が人間社會の發展原動力を專ら生產方法又は生產力に求める唯物一元論であることは既に人のよく知つているところである。すべての人間社會の變化の窮極原因を人間の頭腦の活動、卽ち永遠の眞理や正義に對する人間の洞見というが如き理想的、精神的要因に求めないで、專ら生產方法、生產力というが如き物質的要因に求めんとするところに一元的史觀としての唯物史觀の眞髓があるといわれている。そこで、この史觀を繞る問題の核心は生產方法、生產力の概念にあるといわなければならぬ。唯物史觀の成否は一つに懸つて吾等の概念のもつ內的構造の上にある譯であつて、これ等の概念が果してマルクス――エンゲルスの言う通り徹頭徹尾、物質的性質のものであれば、論理上首尾一貫しておつて內在的には一應問題はないと言うことができるが、若しそうでなくて此等の概念に非物質的分子卽ち觀念的精神的要素が含まれてゐるとすれば、唯物一元論に據つて歷史を解釋せんとする唯物史觀は當然、根底から動搖を來たすものと考えなくてはなるまい。

然らばマルクス――エンゲルスは生產方法、生產力の概念の下に果して何を理解していたであろうか。

マルクスの體系は豫て難解を以て聞えているが、それは無論、彼の思考が深遠で、構想が高大であるためにもよるが、それにも増して、彼の用語、措辭が概ね晦澁、曖昧で明確を缺いでいるためであると思う。マルクスを讀むものは誰しも底知れぬ彼の學殖に驚歎すると同時に、難澁で、多彩な彼の表現に困惑する。彼は、その用うる獨特の概念やその教義に就て、自らこれを周到に規定し、解明する充分の勞を取らないで、ぐん〳〵と議論を進めて行くので讀者は半心半疑のまゝで置いてきぼりを喰う。表現の難解、そして曖昧――こゝにマルクス誤解の種が蒔かれる。無論その責は、主としてマルクス自らが負うべきものである。この點に關して、猶ほマルクスに深く傾到してゐた頃のゾンバルトすら「マルクスは自己の概念を殆ど定義してゐないので、彼の概念は可成り、多義且つ曖昧である。價値、餘剰價値、資本、工場、經營、産業豫備軍、蓄積、集中、窮乏化その他、彼の體系中の幾多重要な概念には明瞭な刻印が全く缺けている。それだから『資本論』の大部分は、セミナール論文としては、非常に悪い點が付けられるのだ」と卒直に批評してゐるが、大體適評ではないかと思う。ゾンバルトは指摘してはいないが、階級や國家の問題に就ても亦同樣である。階級の問題は「資本論」第三卷の最末尾で僅かにその片鱗を見せたにすぎず、國家論は全く斷簡零墨の域に止つていることは人のよく知つているところである。そして茲に問題とする唯物史觀やその基本概念たる生産方法、生産力に就ても何等確定的の説明が與えられないまゝに終つている。「生みつ放しで、育てない」という比喩は何としてもマルクスの免かれないところであろう。こういふ事情から、彼の教義に對して種々の解釋や疑義が生ずるのは當然のことである。曾てパレトがマルクスの言説を蝙蝠になぞらえて、鼠に見える所もあり又鳥に見える所もある[2]と言つているのは妙評であると思う。

1) Sombart: Karl Marx und die Soziale Wissenschaft　Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik. Bd. 26, 1908, S. 444-445.

2) Pareto: Systems socialistes, Vol. 2, p. 342.

（二）

これまで唯物史觀に加へられた解釋の中で最も有力なものは、マルクスの言う生産方法、生産力を專ら技術の意味に解して、唯物史觀は畢竟、社會の發展、變化を技術に依て説明せんとする言はば技術史觀であると解するものであつて、パウル・バルト、ゾンバルト、ハンセン等の諸教授並びにマルクス主義者であるゴルテルやブハリン等の人達がこれに屬する。

パウル・バルト教授は「ヘーゲル及びヘーゲル派の歴史哲學」（一八九〇年）並に「社會學としての歴史哲學」（一八九七年）の諸著により夙に屈强なるマルクス批評家として著聞しているが、彼の唯物史觀批評の要點は次の如くである。即ちマルクスの歴史觀には何等新しいものはない。この種の歴史觀は夙にサン・シモンに依て先唱されたものであつて、マルクスは唯、サン・シモンによつて獨立的地位を與へられた觀念的要素をこの地位から引下ろして、これを悉く經濟的運動に從屬させ、その他の一切の社會現象を技術の進歩の結果と考へたのである。ただマルクスは、技術という代りに、多くの場合「物質的生産力」若くは「物質的生活の生産方法」又は「直接的生活の再生産」という言葉を使つただけである。一切の集合的な思惟、行爲並に苦惱はこの物質的生産力の發展から直接に又は間接に生ずるものであつて、決してそれ自身、獨立の因果關係をもつものではない。マルクスによれば因果の系列は次の如くである。即ち技術の一定の狀態――一定の經營形態――一定の財産制度。この因果の系列は尙、續く。一定の政治的上部構造――一定の社會意識形態。このように、技術の發展が社會の變化を決定するものとマルクスは考へていた。[1]

ゾンバルトは「技術と文化」という論文の中で、唯物史觀は一切の人類史即ち文化の發展を技術の機能に外ならぬと見る技術的史觀の「古典的表現」であると言ひ、一般に唯物史觀の所謂公式といわれているマルクスの「經濟學批判」序文の前半を引用した後、若しこれ等の命題が一般に何等かの意味をもつためには、技術の一定の發展的基礎を與へられているものと解しなければならぬと言つて、次の如く說いている。

「生産力は技術的可能性と見なければ、それ以外に理解しようがない。この技術が經濟生活の形態を決定する。この經濟生活の形態がすべての他の文化を決定する。經濟は技術の一機能であり、その他の文化現象は、經濟の一機能である。それは一定の技術の下に於ては、唯一の經濟可能性しか考えられないし、又一定の經濟方法の下では唯一の文化可能性しか考へられないという意味である」(2)

ハンセン教授も亦バルトやゾンバルト兩教授と同樣、唯物史觀を技術的史觀と見るが、彼の態度は一層鮮明である。「技術的史觀」と題する論文の中で、彼はマルクス――エンゲルスの諸作品から唯物史觀に關する章句を廣く引用した後、次の樣な解釋を與へている。

「確かにマルクスは社會の經濟構造を法律的及び政治的上部構造のよつて立つ土臺と見ている。併し彼は、社會の經濟構造の基底に更に技術學の礎石が存在することを吾々に見逃させない。經濟構造は生産關係として表はされ經濟構造の根底にある技術的土臺は生産方法及び物質的生産力として表はされる。……マルクスは社會の經濟構造を政治的及び知的上部構造の基礎と看做すと同時に經濟構造の建てられる土臺を技術即ち機械的生産方法の中に見出している。要するに、彼は社會の經濟的基礎と社會の技術的基礎とを區別するのである」(2)

生産方法又は生産力を技術と解するものは單に右に擧げたような所謂强硬なマルクス批評家達にとどまらず、意外にも、强硬なマルクス主義者の間にさへも見出されるのである。オランダの急進的マルクス主義者ヘルマン・ゴルテル、それからロシヤのボルシェヴィキであるブハーリンがそれである。無論、彼等はバルト、ゾンバルト、ハンセンと異つて唯物史觀そのものを全幅的に是認するものであるが、生産方法、生産力の意味を技術と解する點に於ては、いづれも同調である。

ゴルテルはその著「史的唯物論」の中で次の如く述べている。

「技術、器具、生産力は社會の下部構造であつて、それは巨大で、しかも複雜な全社會組織がよつて立つ本當の土臺である。物質的生産方法によつて、自己の社會關係を造る同じ人間は又この社會關係によつて、その觀念、表象、見解、原理を造るのである」(3)

ゴルテルの「史的唯物論」は久しくマルクス主義者間に廣く行はれていただけに、この解釋は注目すべきものと思う。

近來、ブハーリンの著「史的唯物論の理論」が、マルクス派側からの唯物史觀の通俗平明な良書として只マルクス主義者間ばかりでなく廣く一般に行はれていることは、人のよく知つているところである。彼が久しくボルシェヴィキであつただけに、彼の解釋はマルクス派側からの最も信憑すべき解說であると見て差支へないと思う。

「社會、社會の發達條件、社會形態、社會內容等を觀察するに際しては、その觀察を生産力の分析又は社會の技術的基礎から始めなければならぬ」。(6) 「人口の數量的增加の可能性すら生産力の發達程度或は同じことだが技術の發達段階に依存するものである」。(6) 「社會の形態は生産力の發達即ち技術の發達によつて決定される」。(7) 「古代の技術が古代の經濟を條件付けたように資本主義的な今日の經濟は資本主義的技術によつて決定される」。(8) 「かように大生産の生産關係は技術によつて決定される。古代ギリシヤやローマに於ける技術から小中生産に特有の生産關係が發生したように、近代技術から大生産の諸關係が發生する」。(9) 「勞働要具の結合と、社會的技術は、人間の結合と關係即ち社會的經濟を決定する」。(10)

これの引用句から、直に明かなように、ブハーリンは生産力と技術とを同一視して、技術の發達を以て社會の發展を説明するところに唯物史觀の存在理由があるものと解しているのである。

以上述べたバルト、ゾンバルト、ハンセン等のマルクス批評家とゴルテル、ブハーリン等のマルクス主義者との間には、無論、唯物史觀そのものへ是否に對して根本的差違が存するのであるが、マルクスの生産方法、生産力を技術と解する一事に至つては期せずして殆ど一致しているのである。私はこの人々の解釋を便宜上暫く技術説と呼んで置きたい。しからば、この技術説は果してマルクスの眞意を完全に表はしたものであらうか。

1) Barth: Die Philosephie der Geschichte als Soziologie 3. Aufl. 1922. s. 663, 673-674.
2) Sombart: Technik und Kultur. Archiv für Sozialwissenschaft u. Sozialpolitik. Bd. 33. 1911, S. 315-316.
3) Hansen, A.H.: The Technological Interpretation of History. The Quarterly Journal of Economics. Vol. 36. 1922. p. 73-74.
4) Gorter, Hermann: Der historische Materialismus. 1909. S. 19.
5) Bucharin: Theorie des historischen Materiaaismus. 1922. S. 131.
6) Bucharin: a. a. O. S. 135.
7) Bucharin: a. a. O. S. 136-137.
8) Bucharin: a. a. O. S. 155.
9) Bucharin: a. a. O. S. 157-158.
19) Bucharin: a. a. O. S. 158.

（三）

マルクスの諸著作を渉獵すると、彼が、歴史上に於ける道具や機械の役割を強調し、偏重して、確かに技術的歴史解釋の立場を取つていると言はれても拒むことができないような章句が少くない。又事實そうであればこそ、技術説は強く提唱され、有力視されているものである。今、その最も代表的な二三の章句を擧げよう。

「新なる生産力の獲得と共に、人間はその生産方法を變化し、生産方法、即ちその生活資料を獲得する方法の變化と共に、その一切のあらゆる社會關係を變化する。手挽臼は封建諸侯を戴く社會を生み、蒸汽製粉機は工業資本家を有する社會を生むのである」。[1]

「蒸汽と機械とが工業的生産を革命した。工場的手工業に代つて、近代的大工業が起り、工業的中産階級に代つて、工業的大富豪、全産業軍の指揮官即ち近代的ブルジョワが起つた」。[2]

「從來の史迹は、凡ゆる社會的生活、隨つて、又凡ゆる現實的歴史の根抵たる物質的生産の發達については、殆んど知る所がなかつたが、然し少くとも有史以前の時代をば、所謂歴史的の研究ではなく、自然科學的の研究に基き、道具と武器との材料に從つて、石器時代、青銅時代及び鐵器時代の三つに區別していることだけは事實である」。[3]

「ダーウインは自然の技術史即ち生活資料を生産すべき動植物の器官の形成に吾々の關心を向けさせた。すべての社會組織の物質的基礎たる人間の生産器官も亦これと同樣の注意に隨するものではないであらうか。技術學は自然に對する人類の積極的關係、即ち人類がその生活維持のための生産過程を明かにし、それによつて、人類社會關係及びそれから生ずる知的觀念の形成方法を明かにするものである」。[4]

「勞働要具の遺物を知ることは、既往に於ける經濟的社會形態を判斷する上に重要な手懸りとなる。經濟上の各時代を區別するものは、何が造られるかということではなく、如何にして、如何なる勞働要具を以て造られるかということである。勞働要點なるものは、單に人間勞働力發達の分度器たるのみでなく、また勞働の依つて行はれる社會的事情の指標ともなるのである」。[5]

これ等の章句は技術説を正當化する好個の典據である。更にエングルスが「家族、私有財産及び國家の起源」や「シュタルケンブルク氏宛の手紙」で説くところには愈々この技術説の不謬を思はせるものがある。

「經濟關係は、社會史の基礎であつて、それは一定社會の人間が生産資料を生産し、交換する方法（Cert und Weise）の意である。だから、それは生産と交換の全技術を含む。この技術が生産物の交換並に分配方法、階級への分裂、從て支配と從屬の關係、從て、國家政治、法律等を決定する。……技術は多くは科學の狀態に依存しているとしても、その科學は又更に多く技術の狀態及び欲求に依存する。若し社會が一つの技術的欲求を有するならば、この事は十の大學よりも科學の發達に資する」。[6]

確かにマルクスもエンゲルスも技術に對して格別の關心を寄せ又これに對して、多大の信頼を置いていたことは事實であつて、この點からすれば、技術說が生れるのも成程無理からぬ所であると思はれる。技術說は有力なる典據の上に基礎付けられて、たしかに唯物史觀に對して一つの屈强な解釋を與えたものである。この事は疑を容れぬ。併し問題はこれでは片付かない。技術說は果してマルクスの眞意に合致するものであらうか。私はそう考へない。たしかに技術說は唯物史觀の心底に强く觸れたものに違ひはないが、さればと言つて、唯物史觀を人類歷史の技術的解釋と結論してしまうことは、何としても涉獵と檢討の不足による速斷という外はない。

果してマルクスは生産方法、生産力の概念を專ら技術と同義に解していたであらうか。一體、技術說を取る人達は、マルクスの生産方具、生産力を直に生産要具の意に解して、その又生産要具を直に技術と同一視しているようであるが、果してマルクスの意味するところは、その通りであつたかどうか。問題はこゝにある。

（1）マルクス「哲學の貧困」改造社版全集第三卷、譯文加筆。
（2）マルクス「共産黨宣言」ナウカ社版二七。
（3）マルクス「資本論」第一卷改造社版一五二。
以下引用頁は總て同版に依る。但し譯文は必ずしも高畠譯によらない。
（4）「資本論」第一卷三五二。
（5）「資本論」第一卷一五一。
（6）エンゲルス「シュタルケンベルク宛の手紙」改造社版マルクス・エンゲルス全集第二十一卷三四九。

（四）

マルクスの言う生産方法とは如何なるものであるか。

これに就て、マルクスは只「生産方法、即ち人間がその生活資料を獲得する方法」「生産方法、即ち生産力がその中で發達する諸關係」というだけで例の如くどこにも充分な說明を與えていないが、これはマルクスが生産をどう理解していたかを見れば自ら判明するのではないかと思う。

マルクスは「資本論」第一卷第五章「勞働行程若くは使用價値の生産」の中で可成り詳細に生産を分析している。「歷史を造り」得るためには、人間は先づ生きてゆくことができねばならぬ。生きてゆくには何はさて置き食うこと、飲むこと、住うこと、着ることが必要である。從て最初の歷史的行爲は、これらの欲望を滿足するための手段の生産、即ち物質的生活そのものの生産である。[1] 生産に於て人間は自然に働きかけねばならぬ。[2] かくて勞働行程は、使用價値を生産し、自然物を人類の欲望滿足のために占有する時の目的活動であり、人類と自然との間に於ける、代謝機能の一般的條件であり、人類生活の永久的な自然條件である。隨つてそれは、人類の凡ゆる生活の形態から獨立せるもの、寧ろその凡ゆる社會形態に相等しく共通せるものである。[3] 勞働行程の本原的な要素即ち、普通にいう生産要素となるものは、（一）人類の目的活動、換言すれば勞働それ自身と（二）勞働對象（三）勞働要具とである。

マルクスが勞働を生産の死活的要因とみていたことは人のよく知つている所である。勞働は先づ人類と自然との間に於ける一行程、換言すれば、人類が彼自身の行爲によつて自然との間に於ける代謝機能を媒介し、調節し、管理する所の一行程である。人類は一の自然力として自然素材そのものに對立する。人類は自然素材をば彼自身の生活に使用し得べき形で占有せんが爲め、彼自身の體に屬している諸種の自然力なる腦や脚や頭や手を運轉させる。[4] 生きた勞働は自然素材を捕捉して、これ等を死の眠から喚び醒まし、單なる可能的な使用價値から、現實的な、有効な使用價値に轉化せしめねばならぬ。これらの物は勞働の火に浴して、使用價値即ち生活手段或は生産手段となるのである。勞働は必ずしも人間のみに固有なものではなく、動物にも見られるところであるが人間にあつては、決して單なる本

能的活動ではなく目的意識的活動であつて、この點に於て、蜘蛛や蜜蜂の勞働とは根本的に相違する。[6]

人間は、その勞働を一定の對象の上にしむける。この對象が即ち勞働對象である。この勞働對象には「單に勞働によつて地球體との直接的結合から分離されるといふに止まるもの、即ち天然自然に存立する物」と既に多かれ少なかれ人間勞働の結果たる物との二種がある。後者が即ち原料と呼ばれる。原料はすべて勞働對象であるが、勞働對象はすべて原料であるといふ譯ではない。勞働對象は、勞働によつて變化を受けたとき茲に初めて原料となるのである。[7]

ところで勞働者はその勞働を勞働對象の上にしむける時、その勞働對象に自己の活動を傳わらしめる所の一の物を使用する。勞働要具がこれである。即ち勞働要具とは勞働者と勞働對象との間に介在して、その物理的、化學的性質によつて、前者のために前者の活動を後者に傳へる物、即ち勞働の補助具の意である。ところで、この勞働要具の中には勞働の作用を直接に對象に傳へる所の、隨つて何等かの形で活動の導子として役立つ所の諸物件即ち狹義の勞働要具とその外に直接には、勞働行程に入るものではないが、然しそれなくしては勞働行程なるものは全然行はれないか又は不完全にしか行はれ得ない所の諸物件がある。そして斯種の勞働要具中、普遍的のものといえば矢張り土地である。蓋し、土地は勞働者に立ち場を與へ、勞働行程に作用部面を與へるからである。尚、この種の勞働要具中、既に勞働の媒介を受けた物の例を擧げれば、勞働建物、運河、街路等がそれである。[8]

かくの如く人類の活働は、勞働行程に於て、勞働要具の助けにより、最初から企圖していた變化を勞働對象の上に與へる。[9] 茲に生産が行はれる。その成果が生産物であり、使用價値である。この全行程を結果たる生産物の立場から觀察すれば、勞働對象も勞働要具も生産の手段として役立つたものである。かくてマルクスはこの兩者――勞働對象と勞働要具――を總稱して生産手段と呼んでいる。[10]

右に述べた所によつて直に看取されるように、マルクスの勞働要具の概念は、技術の通念より遙かに廣義のものである。さきに述べたマルクスの狹義の勞働要具が技術の通念に該當するものと見て差支へないから、彼の勞働要具の概念が技術の通念より遙かに廣いものであることは明かである。廣義の勞働要具に含まるゝ土地、建物、動物、街路、運河等を技術と看做すことは、どう見ても不穩當ではあるまいか。更にマルクスのいう生産手段は、さきに述べたやうに、勞働要具と勞働對象とを併せ含むものであつて、技術概念の内容との間に大幅の距離があることは、一見して明かであらう。

マルクスは、生産の第四の要因とも言うべき企業家を輕視していた。併し、彼が企業家の機能の本質を充分理解していたことは言うまでもない。企業家の報酬の問題に關しては、或時はこれを是認するが如く又或時はこれを否認するが如く、その態度は必ずしも一貫していなかつたようである。

(1) マルクス「ドイツ・イデオロギー」岩波文庫版五六―五七。
(2) マルクス「賃勞働と資本」岩波文庫五五。
(3) 「資本論」第一卷前出一五五。
(4) (7) 前出一五〇。
(5) 前出一四九。
(6) 前出一五四―一五五。
(8) (9) (10) 前出一五二。

（五）

以上述べた所から推してマルクスの觀た生産の仕方、即ち生産方法が生産に内包せらるゝ一要因たる技術と同義であり得ないことは明かになつたことと思う。生産方法は、時間的に、空間的に、たとい如何に變化しようとも、それ

が人間と自然と技術という三要因の複合體であるという本質に至つては不變且つ不動である。生産方法という概念は技術という概念より遙かに廣汎である。特定の生産方法は只にそこに使用された技術によつて規定されるばかりではなく又他の三要素によつて規定される。一定の生産方法が他の生産方法に變るのは只、技術に變化が起つた場合だけではない。勞働の形態や地理的環境に變化が起つた時にも、同様に生産方法が變ることは疑う餘地のない所である。換言すれば生産者はゾンバルトの言うように、決して技術だけの機能ではなく、同様に勞働と土地との機能である。

マルクスは、勞働者の一般的性質と協業や分業に於ける勞働者の結合、配置が生産方法を特徴付け、それに重大なる影響を及ぼすことを充分了解していた。彼の言う所によれば、「マニュファクチュアに於ては、勞働力が生産方法上の革命の起點であり」[11]、熟練勞働者がその生産組織の基盤であつた。マルクスは、「マニュファクチュアが資本制生産方法の支配的形態となつている時代にあつては、熟練勞働者の影響が尙、壓倒的であり」[12]「マニュファクチュアの基礎となつているものが依然として手工上の熟練である」[13]ために資本が絶えず熟練勞働者の我儘と戰はねばならないこと、そしてマニュファクチュア獨特の生産方法を完全に發展せしめんとする場合に逢着する最大の障害の一つが熟練勞働者の習慣と反抗であることを指摘している。[14] 生産は又勞働者の資質によつて左右されることが少くない。「社會的生産の發達の大小は暫く措き、如何なる形態の社會的生産に於ても、勞働の生産力は諸種の自然條件から對立することはできぬ。これ等の條件は、いづれも人種などの如き、人類それ自身に於ける自然と人類を圍繞する所の自然とに歸着せしめることが出來る」[15]。エンゲルスは「分業は大工業が導入された時代までは最も廣大な生産の動力であつた」[16]と言つている。協業に就ても亦同様である。「勞働者が他の勞働者と計畫的に協同作業するときは、彼等はその個人的制限を脱ぎ棄てて、種屬能力を展開することになるのである」[17]。マルクスもエンゲルスも協業と分業を勞働生産力の一般的原因と認めていたのである。彼等は又生産方法が、勞働組織上に生じた變化のために根本的變化を受けると說いている。

「中世のギルド制度は、組合員たる各親方の使用し得べき勞働者數を極めて小さき最高限度内に局限することによつて、親方が資本家に轉化されることを强行的に防止しようとした。……數多き勞働者を同時に使用することは勞働行程の物質的條件に革命をもたらす。……生産方法の革命なるものはマニュファクチュアに於ては勞働力を起點とする」[18]。

マニュファクチュアは精細なる分業を導入することによつて、勞働方法を根本から革命した。更にマルクスは「資本論」第三卷の末尾で、資本制生産方法の特徴を論ずるに當つて、「賃銀勞働としての勞働形態が全行程の姿容と特殊な生産方法そのものを決定する」[19]と說いている。

かくて勞働とその組織が生産方法及びその變化に多大の關連をもつものであることは明かである。

同様のことは勞働行程の第三の要因たる勞働對象に就てもいえる。こゝに問題となるものは自然界である。勞働對象に含まれる凡ゆる要素は自然の與へる資源であるからである。マルクスは一般に自然をば富の不可缺なる源泉と考へていた。だから彼はゴータ綱領が「勞働は總ての富の源泉である」と主張するのを咎めて、「勞働は總ての富の源泉ではない。自然も勞働と同じ程度に於て使用價値の源泉である」と駁し、又他の個所で、

「上衣、リンネル等に含まれる有用勞働の總和を控除するとき、常に殘るところのものは、人類の助力なくして、自然の儘に存在している物質的の基底である。人類は生産上、ただ自然それ自身のする通りにしかなし得ないのである。即ち、素材の形態を變更し得るにすぎない。しかのみならず、この形態變更の勞働に於ても。人類は常に諸種の自然力によつて支持される。されば勞働は、その所産たる使用價値即ち素材的富の唯一の源泉ではない。ウヰリアム・ペテーの言う如く、勞働は素材的富の父であり、而して土地はその母である」[20]

と述べて自然の意義を強調している。

自然資源の特質は生産に使用される技術の性格と範圍を制約し、時には勞働要具そのものにも變化を强うる。「一方には利用すべき落流を缺いで居りながら、他方には水の充溢と戰はねばならぬ位置にあつたオランダ人は風を動力として利用することを餘儀なくされた」(11)。これに對し、「大工業の生地たるイギリスでは、風が餘りに不定にして制し難きが故に、マニュファクチュアの時代に於ても既に水力の利用の方が優勢であつた」(12)。かゝる自然の制約が生産の科學的、技術的要素の研究を刺戟する。

自然資源の差異は勞働生産力の上に著しい影響を與え、剰之、生産方法に變化をもたらす。マルクスは言う。

「勞働生産力は自然的條件に左右される。かくして、相異つた生産諸部面には、相反した運動が生じ、こゝには進歩、かしこには退歩を見るという有樣である。例へば、大抵の原料の分量が單なる季節上の影響によつて左右されるという事實や、森林が採伐し盡され、炭坑、鐵鑛山等が採掘し盡されるという事實を考量せよ」(13)

勞働生産力は諸種の外部的自然條件に制約される。これ等の條件は經濟上二つの大部類に分割される。一は生活資料の自然的資源たる肥沃なる土地や魚類に富む河海湖沼など、二は急激なる落流や航行し得べき河川や、森林や、炭坑や、金屬鑛山などの如き勞働要具の自然的資源である。文明の勞働の初期に於ては、前者の屬する自然的資源が決定を與え、より發達した文明段階に於ては、後者の種類に屬する自然的資源が決定を與える」(14)。マルクスは更に自然環境の影響力を力說して言う、「各共同體は、その夫々の自然環境の內に、相異つた生産手段と相異つた生活資料とを見出すものであるから、隨つて、生産方法も、生活方法も生産物も亦共同體の異なる通りに相異つたものとなつてくる」(15)。勿論、マルクスもエンゲルスも近代の交通手段と國際貿易の發展擴大が、かゝる自然條件の制約を漸次極少ならしむる傾向のあることは、充分知つていたようである。

生産の第三要因である勞働要具殊に技術をマルクスがどう見ていたかは、技術說が唱えられる位であるから別段に說かなくとも容易に想像がつくと思う。この點に就ては殊に資本論第一卷第十三章「機械と大工業」が委曲を盡していると思う。

(1) 前出　三五一。
(2)(3)(4) 前出　三四九。
(5) 前出　四九七。
(6) エンゲルス「反デューリング論」全集第十二卷　四五八
(7) 「資本論」第一卷　三〇九。
(8) 前出　二八六、三〇三、三五一。
(9) 「資本論」第三卷　四一六。
(10) 「資本論」第一卷　一三。
(11) 前出　三五五。
(12) 前出　三五七。
(13) 「資本論」第三卷　二二二。
(14) 「資本論」第一卷　四九七。
(15) 前出　三三二。

（六）

以上勞働行程、卽ち生産の三要素に就てマルクスの所見を述べたが、マルクスは、勞働と勞働要具の變化は歷史的に、卽ち時間的に生ずるに對して、自然資源、氣候等の變化は空間的に起るものと見ていたようである。しかしマルクスはハンティントン教授のいうように、氣候も亦永年の間には變化することがあるものとは考へていなかつた。マルクスは、生産方法が三要素中の一或は二要素の獨占的機能であつて、若し、それが變化すれば、生産方法は全體として自動機械的に一變するものとは考えていなかつた。マルクスはいはば一種の相對性理論の熱心な主張者であつて、

凡そ一つの要素は自分の力だけでは經濟秩序に變化を惹き起すことはできない、必ず他の要素と調和し、融合することができねば變化をもたらすことはできぬ。新なる要素の機能を助け、これと協和する他の要素が揃つて、新なる均衡を可能にし、かくて新生産方法は發足することができるものと考えていた。つまり新なる要素の變化に依て、新なる生産方法が行はるゝためには、これを可能ならしむる新なる環境、新なる生産要因間の均衡が不可缺の先在條件であると見たのである。

かくて分業はマニュファクチュア時代の生産方法の根本特徴であつたが、しかし若し、マルクスの所謂「資本の原始蓄積」という歴史的事件の連鎖が先在しなかつたならば、分業は決して確呼たる根を下ろすことができず、マニュファクチュアも不可能であつたと考へる外はないのである。自然の役割も亦他の事情に依存する。もし自然が不毛であれば、餘剰勞働の現象は存立し得ず、隨つて何等の資本家、何等の奴隷所有者、何等の封建領主、一言すれば何等の大なる所有階級も存立しないことになる。自然は餘剰勞働、餘剰價値、並に餘剰産物の發生に可能性を供する。確かに有利なる自然條件は勞働生産力を増進するが、生産力は又人類の文化の一足の發展に依存する。

「資本關係なるものは、久しきに亘る發展行程の産物として與えられる經濟的地盤の上に生ずるものであつて、資本關係の起點たり基礎たる勞働生産力の發達は、自然の賜物ではなく、幾萬年に及ぶ歴史の賜物なのである」(2)

技術に就ても亦同様である。技術は固より生産の重要因素に相違ないが、この技術をば生産組織の原動力と考えることはマルクスの社會哲學の眞意を傳うるものではない。マルクスが機械をば近代資本主義の基礎と考へていたことは事實である。併し、このことは、機械のみが生産方法に變化を強うるものであることを意味するものではない。他の條件が許す時に始めて、機械は生産方法に有効な變化を與え得る。だからマルクスは言う、「ヴォーカンソンやアークライトやワットなどによつて與えられた諸發明は、彼等がマニュファクチュア時代から供給されたその儘利用し得べき幾多の熟練機械工を見出したが故にのみ遂行し得たのである」(3)。若し生産方法と技術とが同義であるとすれば、一定の國に新なる技術上の發明が出現すれば、それと同時に生産方法の上に變化を惹起しなければならない筈ではないか。然し、事實は必ずもしそうではなかつた。マルクスはこの間の消息を見逃がさなかつた。

「今日、イギリスに發明された機械でありながら、北アメリカにのみ利用されたものがあるという事實も生ずるのであつて、十六七世紀にあつても、ドイツで發明された機械にしてオランダにのみ利用されたものもあつたのである」(4)。

凡そ機械は何よりも先づ資本主義が一般的情勢に適合するに至らない限りは、決して資本主義を導入し得るものではない。この思想を、マルクスは「賃勞働と資本」の中で力説して言う。

「黒人は黒人であり、一定の諸關係の下で、彼は初めて奴隷となるのだ。紡績機械は紡績のための機械である。ただ一定の諸關係の下でのみ、それは資本となるのだ。これ等の關係から引離されれば、それは決して資本ではないのであつて、このことは、金がそれ自體として貨幣でなく、また、砂糖が砂糖價格でないのと同じことである」(5) と。

マルクスによれば、生産手段や生活資料は、それが直接的生産者の所有に屬する限り資本でなく、又當該社會は資本主義的ではない。それが、無産の勞働者に對する搾取手段たると同時に支配手段として役立つ條件の下に置かれたときに初めて、資本制的の蓄積並びに生産方法が生れてくるのである。(6)

(1) 「資本論」第一卷　四九六。
(2) 前出　四九七。
(3) 前出　三六二。
(4) 前出　三七三―三七四。
(5) 「賃勞働と資本」岩波文庫版　五五。
(6) 前出　七六〇。

（七）

社會の發展に於ける生産の地位を一層明かにするには、それと消費、分配、及び交換との一般的關係を知ることが必要である。マルクスは、この問題を遺稿「經濟學批判の序論」の中で解明している。マルクスは本稿の前半では、全體として、生産の消費、分配、交換に對する優位を强調し、消費、分配、交換は何れもそれ自身決して獨立性をもつものではなく、絶えず、生産のために制約されるところの非獨立的現象であると說いていながら、結論に至ると急に調子を變えて、生産と消費、分配交換との相互依存關係を說いている。

「吾々の到達した結果は生産、分配、交換、消費が同一であるということではなく、それ等がいづれも一全體の構成分子であり、一單位の夫々異つた部面であるということである。生産は他の要素を支配するが、無論、生産も他の要素に影響される。例へば、市場、卽ち交換領域の擴大と共に、生産の規模は增大し、一層分化する。分配の變化と共に生産は變化する。……最後に消費の需要も亦生産に影響する。各要素間に相互作用が行はれる」[1]

かように生産の優位を或は、認むるが如く或は、認めざるが如く、こゝにもマルクスの論述の曖昧さが研究者の判斷を迷はしている。唯、マルクスが、生産に對する交換の影響力を常に明瞭に認めていたことは注意すべきことであると思う。マルクスは市場の性質と範圍が、各時代の分業を制約し、市場と商業とが古い生産方法を破壞して、新しいものを造り出すことを到る處で述べている。

「資本制社會に入らんとする當時にあつては、商業が工業を支配していた。近世社會に於ては、それが反對になつている、勿論相互通商する各共同體の上に商業が多かれ少なかれ反應作用を及ぼすことは事實である。商業は享樂及び生活をば生産物の直接の使用よりも寧ろ販賣に懸らしめ、かくすることによつて、生産を益々交換價値の下に從屬させる。これがために舊來の諸關係は分解される。商業は次第に生産そのものを蠶食し、生産部門を擧げて自己に依存させる」[2]。「かの地理上の諸發見と共に起つて、商人資本の發達を急速に促進した商業上の諸大革命が、十六七世紀に於て、封建的生産方法から資本制生産方法への推轉を促す一の主要な要素たりしことは何等の疑を容れない。……世界市場の突如たる擴大や流通商品の倍加的增大や……植民制度など――これ等のものが生産の封建的制限を粉碎し、そして資本主義の第一期たるマニュファクチュア時代を確立する上に本質的の貢獻をなした」[3]

「ドイツ・イデオロギー」も、「共産黨宣言」も、交換を生産と共に歷史發展の原動力として、生産と同列に置き、エングルスの「反デューリング論」も亦「生産、それについて交換があらゆる社會構造の基礎である。この兩者はあらゆる瞬間に於て、相互に制約しあい、また經濟曲線の横線と縱線だともいえるほどに、相互に作用し合うものである」[4]と述べて、交換の社會發展上に於ける意義を强調していることは吾々の斷じて看逃してならない點であると思う。

次に生産力の說明に移りたいが、その前に以上述べた所を要約して置きたい。

生産方法は勞働、勞働對象、勞働要具（人間、自然、技術）の結合を代表する一つの有機的全體であつて、これ等の要素は積み重ねた小石のようにばら〳〵のものではなく、互に調和的に關連し、相互に依存しているものである。若し、是等の要素のいづれかの性質に變化が生じても、他の要素がこれに順應しない限り、生産方法には變化は起らない。更に生産方法は分配、消費特に交換と密接な關係をもつ。從つて、マルクスの所謂生産方法とは生産に使用される技術的方法を含むばかりでなく、もつと遙に廣汎なものである。生産方法が歷史發展の基礎であるというマルクスの主張を歷史の技術的解釋と見ることは、決してマルクスを正解するものとは言えない。唯物史觀の意圖するところはもつと廣汎なものであると思う。

（1）全集第七卷　三九九。但し譯文加筆。
（2）資本論　第三卷　二九八。
（3）前出　二九一。
（4）反デューリンク論岩波文庫版　下卷　一七七、五。

（八）

マルクスに於ける生産力の概念は、生産方法の概念よりも更に吾々を困惑させる。

先づ、生産方法との關連を明かにして置きたい。マルクスは人類社會生活のすべての關係及び變化を決定する究極の要因を或る時は生産力と呼び、又或る時は生産方法と稱してその用語の統一をしなかつたので、歴史發展の中に生産力と生産方法との二元素が同格的に存在するのではないかとの疑念を起させているようであるが、然しマルクスの眞意は決してそうではない。マルクスによれば生産方法と生産力とは二つの異つた實體でわない。それは只、一のものを異つた光で見たもので、實體は一つである。兩者は恰も形式と内容との關係である。生産方法とは、生活資料を生産するために、結合される諸要素の總體を代表する一の總稱名辭である。これに反し、生産力とは、直接にこれ等の要素を指稱するものである。前者は、集合的、有機的單位を指し、後者はそれを構成する部分を意味するものである。生産力は生産方法を構成する素材であり、それに、肉と血と外貌を與えるものであつて、總ての生産方法はその存在を、これに先在する生産力の發達に負うものである。生産力は生産方法の函數である。マルクスは資本論第三卷で「資本制生産方法の科學的分析は、資本制生産方法が、他の總ての生産方法と同様に社會的生産力の一定の段階及び生産力の歴史的發展形態に依て條件付けられたものであることを認明する」(1) と述べている。だから現存の生産力が未熟であれば、その結果として生産方法も亦同様未熟である。生産力が成熟して、その性格を變ずれば、生産方法も必ずや變化して、新なる社會秩序が生れる。「社會的勞働の生産力を發展せしむることは、資本の歴史的任務であり、特權であつて、これによつて資本は無意識の間により高級な生産方法の物質的諸條件を造り出す」(2)。更に「哲學の貧困」の次の一句は、最もよく此の關係を傳えている。「新なる生産力の獲得と共に、人間は其の生産方法を變じ、生産方法、卽ちその生活資料を獲得する方法の變化と共に、その凡ゆる社會關係を變化する。手挽臼は封建諸侯を戴く社會を生じ、蒸氣製粉機は工業資本家を有する社會を生むのである」(3) これによつて生産力の概念がマルクスの體系に於て如何に重要な地位を占めるかが充分に想像されると思う。マルクスの祖述者も批評家もこの事實を認めないものは殆どないといつていゝ。バルトやツガン・バラノウスキー等の如き錚々たるマルクス批評家が特に生産力概念の分析と究明に多大の關心を寄せたのも、これがためであつた。

生産力とは何であるか。如何なる内容をもつものであるか。この問題に入る前に、マルクスはこの概念を何處に得たものであるかに就て一寸觸れて置きたい。

マルクスはその著「經濟學批判」の序文で彼がこれまでの專攻の法學、哲學、史學から經濟學の研究に轉じた種々の動機の一つが、當時ドイツで盛行した「自由貿易と保護關税に關する論爭」であつたと言つている。これに就て想ひ起さるゝことは當時、ドイツ關税同盟の更新が激しく論議され、「經濟學國民體系」（一八四一年）の著者フリードリッヒ・リストが保護政策の急先鋒であつたことである。リストの前記の著書や多數の論文の中には「生産力」の觀念が頻りに使用されている。リストの觀るところによれば、生産力とは、物質的富を生産するに當つて國民に役立つ精神的、物質的手段で、宗教、政府、制度、運輸等これである。そこでマルクスは「生産力」の概念を、彼に得て、只その内容に多少の變更を加えたものであるという一説がある。然し、マルクスの「生産力」概念の源泉は獨り、リ

ストだけでなく、當時、マルクスが既に研究に着手していたスミスやリカルドや英佛の社會主義者であつて、殊にスミスやリカルドに「生産力」の表現が頻りに使用され、マルクス自身がこれを意識していたことは「哲學の貧困」や「資本論」に於ける引用を見ても明白である。兎も角、マルクスが、これ等の人々から生産力の觀念を敎えられたことは疑を容れぬ所であらう。

然らば、この生産力の概念はマルクスに於て一體何を意味するか、例によつてマルクスは、どこにも、これに就て明確な説明を與えてわいない。その上にその用法の複雜多樣であることは驚く許りで、到底さきの「生産方法」の場合どころではなく、果して、何れが彼の眞意であるのか、その判定は甚だ困難であつて、流石にマルクス主義者間に於てさへも、困惑の色が深く、先師の「放縱」を只管彌縫することに腐心している有樣は寧ろ痛々しくさへ見える。ハインリッヒ・クノー敎授や河上肇博士の場合がそのよき例である。マルクスは才智に惠まれてはいたが、明敏な理能力 Verstandesschärfe を缺いていたというロッシャーやゾンバルトの批評が決して根據のない。ことは以下述べるところに從つて次第に判明することと思う。

先づ、氣が付くことは、マルクスが生産力（Produktivkraft, Produktionskraft）という言葉を全く異つた二つの意味に用ひていることである。第一の意味に於ける生産力とは、人間が富を生産するために自然に働きかける場合に利用され、動員される種々な諸力の總稱であつて、多くの場合、マルクスはこれを生産諸力（Produktivkräfte 又は Produktionskräfte）と複數形に用ひている。

第二の意味の生産力とは、特定量の勞働が財貨を生産する効率の意であつて、それは勞働の生産性、生産度（Produktivität, Productivity）又は勞働の生産能力（Produktionsvermögen der Arbeit）というのと同じ意味である。

マルクスが勞働生産力、社會的勞働の生産力、勞働の社會的生産力などといつている場合の生産力がこれに該當する。

第一の意味に於ける生産力は絶對的の大きさを示すに反し、第二の意味に於ける生産力は相對的の大きさを示す。勞働の生産力、生産性、生産能力とは投下勞働量に對する生産物の數量の割合を表明するものである。以上のように第一義の生産力と第二義の生産力とは、その内容を異にする別個の概念であることに注意を要する。しかし、この二つの同名異質の概念は無論相互に内的な關連をもつている。マルクスは、これ等を相互に因果關係にあるものと見ている。

「或る生産手段の増大は勞働生産力増進の結果であり、他の生産手段の増大は勞働生産力増進の條件となるのである。例へば、マニュファクチュア的分業と機械の充用とによつて、同一時間により多量の原料が加工され、隨つて、より多量の原料及び助成材が勞働行程に入るという如きは、勞働生産力増進の結果なのである。他方にまた、充用機械や勞働家畜や鑛物性肥料や排水管などの量は、勞働生産力増進の條件である。だが、條件であるにしろ、結果であるにしろ、併合される勞働力に比べてより大となる生産手段の量は、勞働生産力の増進を言ひ現はすものである」[4]。

この關係の問題は暫く措き、社會發展の或は決定要素として、或は推進力として唯物史觀の基本觀念に据えられているところの生産力の觀念が、上に述べた第一義の生産力の觀念であることは言うまでもない所であらう。

（1）資本論　第三卷　四一三。
（2）前出　二二一。
（3）前出　五五〇。
（5）資本論　第一卷　六一二。

（九）

然らば唯物史觀の基本觀念たる生産力即ち富の社會的生産行程に利用される諸種の力の總稱たる所謂生産諸力と

は、具體的に如何なるものを指すものであらうか。こゝでも亦吾々はマルクスの諸著作中に散在する斷片隻句を收拾補綴する外はない。共産黨宣言に曰く、

「ブルジョワジーは僅か百年ほどの階級的支配に於て、一切の過去の時代を合せたよりも一層多量な、一層巨大な生産力をつくり出した。自然力の征服、機械、工業及び農業への化學の應用、汽船、鐵道、電信、全世界各地の開墾、地下から魔術で呼び出された全人口――このような生産力が社會的勞働の内部に眠つていようとは前代の誰が豫想したであろうか」(1)。

「哲學の貧困」にも、生産力の意味を示唆した次のような一節がある。

「プロメトイスが吾々に、人類の生産力を增加させる所の分業、機械の應用、自然力や科學力の利用を敎へた限りに於ては……この新しいプロメトイスは遺憾ながら餘りに來かたが遲かつた」(2)。

これで見ると、生産力の中には、自然、技術を含む生産要具の外に人間や科學までも含まれていることがわかる。即ち物質的要素だけでなく、人間や科學等の精神的要素までも併せ含まれていることを看逃してはならぬ。このような章句が方々に見出される。「機械は一つの生産力にすぎない」(3) と言うかと思えば「勞働者の存立は一個の單なる生産力としてより外には價値はない」(4) と人間を生産力規し、更に「あらゆる生産要具の中で、最大の生産力は革命的階級それ自身である」(5) と、同じく人的要素を生産力に數へ、又分業や協業の如き勞働の組織をも生産力と見ている。「協業及び分業に依つて與えられる生産力は資本にとつて何等の費用とはならぬ。それは社會的勞働の自然力である」(6)。マルクスが精神的分子である科學をも亦生産力と看做していることは「科學を勞働と別個の生産力となし、これを資本に奉仕せしむるところの近代工業云々」(7) という「資本論」一句が端的に證している。

このように、その時々によつて變る、言はゞカメレオン的な説明に幻惑されて、讀者は、全く彼が眞意の判定に困惑し、果ては匙を投げてしまつている樣であるが、それは本來、統一がなく又統一すべからざるものに統一を求め、矛盾の中に調和を求めようとする無理から當然起るものである。私は思う、これ等の章句は何れもマルクスの眞意である、言いかえれば、生産力の中に自然力、生産手段、勞働組織、革命的階級から科學並びに人種に至るまで、凡て富の生産に必要な自然界及び人間界の諸勢力を物心兩要素を併せて含ませるというのが、實にマルクスの僞はらざる意圖であつたのである。豫め唯物史觀の首尾を慮つて、マルクスの種々の發言を取拾することよりも、それ等のものを有るが儘に觀察することが何よりも必要である。かく解釋すれば問題は意外に簡單である。そこで彼の生産力概念が單なる物質的性質のものではなく、精神的要素をも含むものであることが判明した譯である。この點が特に記憶すべき大切な事柄である。そして、この私の見方が公正なものであつて、決してマルクスを誣うる所謂俗學的否曲でないことを一層はつきりさせるために「マルクス不謬」(Marx infallible) を高調するマルクス亞流の中、特に前記クノー敎授と河上肇博士の主張に觸れて置きたい。クノーは言う、

「マルクスの見解によれば、生産力とは社會的生産行程に利用されるすべての力、即ち、自然力と並んで人間や動物の勞働力及び所謂『技術の力』である。隨つて生産力には物的と人的との二種がある。――全生産力の中で最も重要な地位を占めるものは、マルクスによれば、人間の勞働力である。無論これには純肉體的勞働力のみならず精神的勞働力も亦含まれる」(8)

マルクスの生産力の内容に物心兩要素の併び存することを忠實なマルクス主義者が認めている點が大切である。

河上博士の分析はクノー敎授のそれより數段進んだ、充分傾聽に價するものであるが、同博士は、マルクスの生産概念を左表の如く分析されている。

一、人間によつて占有されたる自然力（水力、風力、等々）

二、人間
- （a）自然力としての人間（協働者の數、その體質等々）
- （b）社會力としての人間
  - （イ）勞働の社會的組織、等々）
  - （ロ）革命的階級、等々）

三、人間の生産
- （a）物物質的生産物（生産手段）
- （b）精神的生産物（科學）

同博士の分類法の當否は暫く別として、マルクスが生産力の意味は、この表に於て大體盡されていると思う。これが强硬なマルクス主義者の僞はらざる科學的告白である。私の分析がマルクス曲解でないことが證明されたわけである。これに依つて、マルクスの生産力概念が如何に多義的且つ異質的であるかゞ窺われよう。從つて生産概念の一端を捉えたにすぎないバルト、ゾンバルト、ハンセン等の技術說は無論、正解ではないと共に、ゴルデルやブハーリン等のマルクス主義者も決して師說に忠實であつたとはいえないわけである。問題は、これ等の人々がマルクスを正解したか否かではない。もつと重大なことを看逃してはならぬ。それは唯物史觀そのものの死活に關することである。卽ち、生産力概念の內容が前述の分析の示すように、果して物心兩要素から構成されているものとすれば、歷史解釋上、嚴密に唯物一元論を標榜する唯物史觀は首尾一貫を期することができなくなり、論理構成上當然破綻せざるを得ないという破目に陷るわけである。マルクスが時折物質的生産力という風に特に物質的という限定詞をつけたことは、恐らく右の樣な事實を暗に意識していたためであらう。然し彼はこの形容詞を附加することを必ずしも勵行してはいない。このように勵行していない所にも、精神的要素への關心を完全に淸算し切れなかつた、言はゞどつちつかずの曖昧な心境が窺われる。物質的要素の一方的偏重だけに徹し切れず、精神的要素にも心をひかれていたという微妙な心理がマルクスを支配していたのではないかと思う。いづにしてもこのようなマルクスの曖昧さから、種々な誤解が生れたのであり、又こゝに唯物史觀の「アキレスの踵」が存在することは疑ひない。そこで、この不徹底さに着目して、この生産力の內容から精神的要素を拾象し、專ら、これを物質的要素だけに局限してしまつて、以て唯物史觀の「アキレスの踵」を補强しようとする一部の人々の努力が生れる。ツガン・バラノフスキーが「マルキシズムの理論的基礎」の中で說くところがこれである。こゝではツガンの說に觸れる遑がない。いづれにしろ、こゝに唯物史觀に對する根本的批評の端緖が伏在することは事實である。

以上に依て、マルクスに於ける生産方法、並びに生産力の概念を分析した結果、それ等がいづれも單なる技術の外に種々の物心兩要素を包攝していることが明かとなり、而もこの事は最も忠實なマルクス主義者さへも公認している旨を述べた。吾々は科學や人種は無論のこと、分業や協業や一般勞働の組織をば、まさか物質的要素だと言つて濟ますゝ譯には行くまい。そこで玆に、當然起る疑問は、かゝる物心双頭の概念を根基とする限の歷史觀が果して、その言葉の眞の意味に於て唯物史觀の名に適はしいものと言えるかどうか、反對から言えば、唯物史觀は、かゝる二元素を含む概念を基礎として、果して論理的破綻なくして、自已を貫徹することができるであらうかと言うことである。無論、答へは否である。

唯物史觀は唯物一元論の上に立つ歷史解釋である。これがマルクスの史觀の眞骨頭であり、こゝに又同史觀の獨特の存在價値があるのである。それは、何よりも先づ一元論でなければならぬ。單一の力を歷史の決定的と見ることである。だから生産力概念が物心二元素を含むものとすればこれは明かに論理上の約束に背いたものという外はない。

次に、唯物史觀の他の支柱は唯物論であるが、いづれの形態のものたるとを問はず、凡そ唯物論である以上は、決定

的要素としての觀念、精神の存在を許さない筈である。科學は精神的力であつて、他の意識形態と同樣に物質的要素から發生したもので、それ自身、獨立的要素ではないとされている。然るに、マルクスは、既に述べた樣に頻りに近代技術や生産上に於ける科學の優位を强調し、これを有力な生産力と見ている。これは唯物論の面を自ら打つものではなかろうか。かように觀察すると、唯物史觀の生命とする一元論的主張も唯物論的主張も共に稀薄となつて、結局マルクスが强く排擊した唯心史觀と大差ないものとなる惧れがないであらうか。

以上私は生産方法、生産力の概念を通じて、聊か唯物史觀に對して專ら、內在的批評の一端を述べた。尙超越的批評は他日に讓りたい。

（1）Das kommunistische Manifests, Kautsky's Ausgabe S. 30.
（2）「哲學の貧困」全集第三卷　五四一。
（3）前出　五六八。
（4）「自由貿易問題」前出　六二一。
（5）「哲學の貧困」前出　五九九。
（6）「資本論」第一卷　三六六。
（7）「資本論」第一卷。
（8）Cunow: Die Marxsche Geschichts-, Gesellschefts und Staatstheorie. II. Bd. S. 158-159.
（9）河上肇「マルクス主義經濟學の基礎理論」二〇六。

莅戸政以の「邇言」

野村兼太郎

一

著者莅戸九郎兵衞政以は太華莅戸六郎兵衞善政の子である。世子御傳役を勤めてゐたが、享和三年六月六日、父の跡を襲つて中老職となつて、父の米澤藩財政改革十六箇年計畫を完成した。上杉鷹山侯の支持を得て、豫定の年限より延びはしたが、反對派神保綱忠・須田滿丈・服部正相等の不平を抑えて、兎に角成就し得たのである。

「邇言」は文化七年九月、上杉彈正大弼齊定の家督相續に際して捧呈した意見書である。齊定は系譜の上では鷹山治憲の孫、治廣の子である。實際は一族上杉勝熙の子である。要するに上杉家歷代の財政難を述べて、治憲・治廣二代の改革の狀況を說き、今後の治世を如何にすべきかを戒めたものである。叙述に特に珍奇なものはないが、享保以後、大名の財政が如何に困難を極めたものであるかを知る上に、多少の材料を提供するものであるから、敢てここに紹介して置かうと思ふのである。父莅戸太華の著書「寶曆隨筆」「寡婦之利」「政論」「太華翁建議」等は、抄錄ではあるが、「日本經濟大典」中に瀧本誠一博士がすでに紹介されてゐるが、子政以のものは未だ活字になつてゐないやうに思ふ。少くとも管見に入らない。

私の所藏してゐる「邇言」は美濃判紙二十三枚に認められた細字のものである。政以自筆のものであるかどうかは解らないが、最後には「文化七年九月、莅戸九郎兵